

# CHOISIR

33





# CHOISIR

Vol.33

## CONTENTS

### 特★集 家族

家族的だけど家族じゃない

小倉美保

2

たったひとつの大きなワガママ

色川奈緒

5

26歳現在の、私にとっての「家族」

ぷりしら

8

できるものなら、結婚したい

掛札悠子

10

私のヘラヘラ闘争方法論

小口容子

12

### やおい論争

少女マンガにダイエットを(出)

「少女マンガ時代」

佐藤雅樹

14

やおいは私の病である (前編)

絵理子

18

広がるやおい論争

栗原知代

20

宴のあと

色川奈緒

26

28号に関するお詫び

田中美津

28

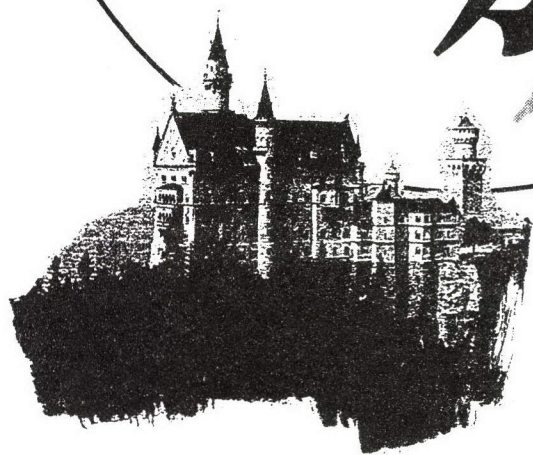
La Volix

29



特★集

# 家族



家族とは、もともと、このような世界の、切実な営みから形作られた、だからこそ、  
いとも単純明快なはずの、血縁の単位を意味する言葉だったのだろうか。

けれども、今、このような世界に、私たちは住んでいるわけではない。当然そうなる  
と、家族の意味も変わってしまう。

現在の私たちが抱えてしまった「家族」の矛盾。簡単な解決策など、あるはずもない  
のだが、まず、ひとりひとり、徹底して孤独を引き受け、孤独とつきあい、そこから特  
定の相手と慈しみ合い、手を取り合うつながりの価値を見つけだして、家族をさまざま  
な形で作り上げていくしかないのかもしれない。



# 家族的だけど家族じゃない

小倉美保

何か物を書くたびに、この話を挿入している。「もうしつこい！」と思う方もいらっしゃるかと思うが、私は友人同士、男三人女一人の四人暮らしをしている。埼玉県の南部の、とある市内。駅から一五分、住宅、商店、工場が入り交じってごちゃごちゃしたあたりに、4LDK（という西洋風な言い回しもおこがましい、古いボロ家だ）の一戸建てを借りて、昨年（の五月、共同生活を始めた。たまにはけんかもするが、けっこう仲良く楽しく、日々の生活を送っている。昔の共同体のような必然性もないし、コミュニケーションみたいな思想もないし、欧米のシェアメイト・フラッツみたいなさばけてもいないけど、意外とうまくいっている。

昨年の十一月ごろだったか、某新聞の記者がうちへ来た。新年から始まる家族問題

の記事を書くための下取材だということだった。記事の主旨は「従来の形にとどまらない新しい家族が生まれてきている」という認識に立って、「家族の在り方を見つめ直す」というものだったように思う。それで、記事にするかどうかは別として、とにかく我が家の話を聴かせてほしい、ということになった。

うちの連中は、基本的にしゃべりたがりだし、自分たちの暮らし方をまんざら自慢に思っていないわけでもない。「うちは家族的だけど、家族だとは思っていないのだけ……」と言いながらも、「話をするだけなら……」ということ、とにかく実物を見てもらって、リアルに受けとめてもらおう、とうちへご足労いただくことになった。

彼女（記者は三〇歳ぐらいの女性だった）は、夜に強い私たちに付き合ひ、七時ごろ

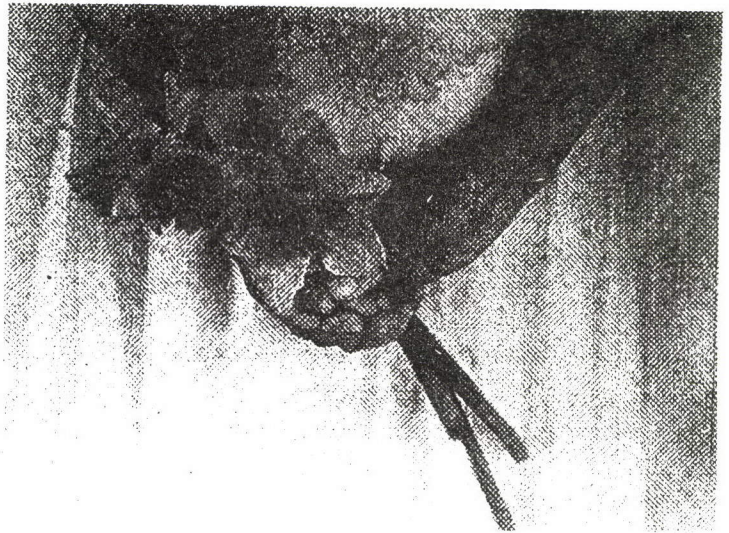
から十一時ごろまで、それぞれの勝手な話を聞かされ、「自慢の」無国籍家庭料理を十時ごろに食べさせられ（これってけっこう田舎の人っぽい）、まあ、いろいろ苦勞してくださいましたのだった。

私はものを書くことを収入源の一つにしている。「インタビューする」ことはよくあるのだが、「インタビューされる」ことはめつたになかったから、これはメディアというものを考えるのに、とてもいい機会になった（あつ、これでは前号のテーマですな）。

記者が帰ったあと、どつと疲れが出た。そりゃあれだけしゃべれば疲れるわな、というぐらいしゃべったからなのだが、なぜそんなにしゃべったかと言うと、自分たちのことを、なかなかわかってもらえない、その歯痒さゆえだったろうと思うのだ。



# 家族



たとえば夫婦別姓のようにはつきりとした意図や必然性があるわけでもない、ただただらだと寄り合って暮らしている（ようにみえる）この共同生活の「楽しさ」が、どうもうまく伝わらないことに私は焦っていた。新しいこと、人とは違っていることを人に説明するには、とにかく「理由」が必要なのだ。うちの場合、なぜこんな暮らし方しているかということは「楽しいから」の一語に尽きてしまうところがある。でも「楽しい」というのは、伝えづらいことなんだよね。

ほら、たとえば新婚夫婦の夫が「結婚して何がよかったですか」と聞かれて、「家に帰ると電気がついていること」とか「朝起きたとき、味噌汁の匂いがあること」とか、よく応えているシーンがあるよね。こんな使い古された言葉を使うのは、オリジナリティがない人だと思っただけで、でも、最初にこの言葉を発見した人は、すごい文学的で、センスのいい人だったんだろうなう、とも思うのね。この言葉を「家事をしないで済んでうれしい！」と聞くのはたぶん悪意で、まさに幸せの言語化なんじゃないか。で、うちのようなケースでは、そういう形の「幸せ」「楽しさ」説明では、納得してもらえないようなんだ、これが。

そういう「幸せ」や「楽しさ」は、従来の家族の専売特許で、家族じゃない暮らし方を選択している人は、何かもつと高尚な、あるいは思想的な、あるいは戦略的な理由が問われてしまうのですよ。

記者は、それこそ手を尽くして質問してきた。八二問ぐらい聞かれたような気がする。だから、そのなかのいくつかの質問を取り上げてあれこれ言うのは、とてもかわいそうなのだけれど、前段に関わることから言っちゃう。すごくお互いのズレを感じた質問が二つあって、一つは「小倉さんは「家族」を嫌悪しているんですか」というもの、もう一つは「Yさん（ヘテロで男性で、うちで唯一パートナーがいない人間。あとは「いちおう」いるからね）は、向き合う関係が嫌いなんですか」というもの。どちらもすごく応えるのが難しい質問なのだ。

というのは、まず前者の場合、「そこでいう家族ってなに」ということを置いておくとして、「はい」と応えると、「家族が嫌いだ」という変な人」にされてしまうし、「いいえ」と応えると、「家族が好きなのに、家族が作りないかわいそうな人」にされてしまう。家族って、いいところも悪いところもあるじゃない？ それを「いい」ものだと



か、「悪い」ものだとか言うほど絶対化もしたくないし、それほど家族に興味もない。私はとっさにうまく応答することはできなかった。

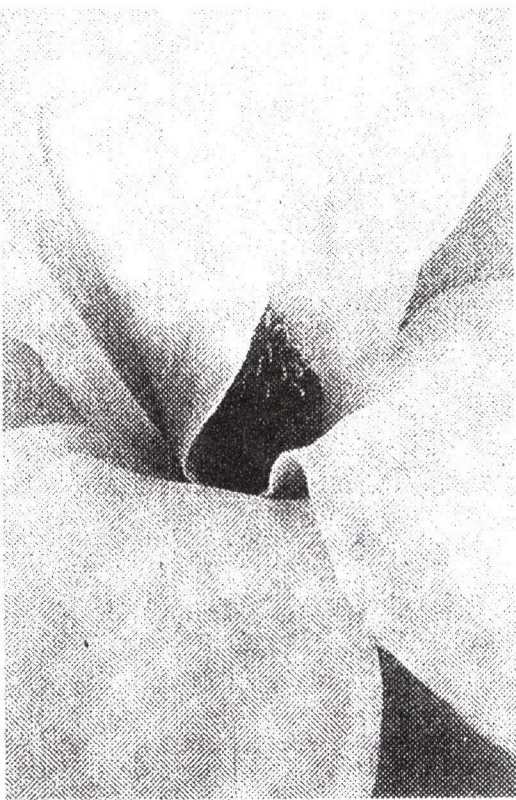
後者の質問もしかり。向き合う関係が「嫌いだ」と応えれば、変わり者だし、「好きだ」と応えれば、好きにも関わらず、そういう関係が作れないかわいそうな人、ということになってしまわないか。これも応えづらいゾ。まあ、聞かれた本人は、「僕はわりやりにこちらを向かせる関係が好きじゃないだけ」とかなとか応えていたけど。

そんなこんなで、家族という存在、イメージの邪魔さをつくづく感じたわけだ。

一九九四年は「国際家族年」なんだそうで、テレビや雑誌を見ても、「家族とは」を問う企画が目白押しだ（このCHOISIRもその一つなんでしょう）。どんな世界、どんな時代にもある普遍的な関係、だから何らかの正当性と必然性と価値が家族のなかにはあるはず、と考えるのもうやめちやってもいいかな、と私は思っている。お父さんとお母さんと子どもという関係が、この時代の主流だったから、どんな世界や時代の中からも「家族」を探しだしちゃっただけなんじゃないの？なんて、社会史ふうにシニカルに考えている。いま、私にとって、この共同生活が確かな現実だから、「どんな世界にも共同生活はある。だから、ここには何らかの正当性と必然性と価値が

ある」とかなんとか言っちゃうもんね。来年の五月一五日、この共同生活は一応ひとくぎりつくことになっている。この暮らして、実は二年の期限付きで始めたものだ。だって、友人関係が崩壊するまで続けたくないじゃない？ 期限がないというのは、そういうことだよ。ね。（ちなみに、うちがうまくいっている秘訣は、この期限と、誰がいくら金を出したということがはっきりわかる家計簿だよ。これから共同生活をする人にはゼツタイおすすすめしておく。）

期限が切れる間際には、延長か終了か、もう一回話し合う予定なんだけど、お開きの際には、みんなでグアムにでも行こうか、なんてのはの話している。





# たつたひとつの大きなワガママ

色川奈緒

は。

今年の正月、相方の両親の家へ行った。べつに「息子さんをください」と言いに行つたわけではなく、彼が青春時代を過ごした街での大晦日のイベントに出演したので、冬休みを利用して旅行気分で作かけ、高いホテル代を浮かしただけだ。

東京へ行った息子が東京産のオナゴを連れて帰れば、親のほうに緊張する。これはもう仕方ないことだが、ただのお友達、というわけにはいかない。私のほうも、堅苦しい話にのつとつた訪問ではないのにもかかわらず、まあ、イチオチ緊張はして行つたのだが、彼の両親がともフランクな人々だったので、緊張感も空中分解し、ずつとケタケタ笑つていたという、予想外の日々を過ごした。堅気じゃない息子を育てただけあつてかどうか、彼らも堅苦しい話はいつさいしなかつたのだ、とりあえず

なにしろ、当人たちは「結婚」願望が希薄である。歩いて二〇分ほどの距離に住んでいて、週に二、三度、双方の家に行き来る生活が気に入っているのだ。

一緒に暮らすという考えもないではないが、ヘタすると息が詰まってしまうかもしれないという危惧もある。二人とも、孤独な時間が好きなのである。それがないと、イライラしてしまうのである。それに、何より、それぞれ自分のやりたいことがあつて、今のところ、他のことにエネルギーを莫大に注ぐことはむずかしい。「貧しくても愛があれば」とか「愛があるなら、ひとつ屋根の下」という刷り込みは、ない。

だが、知り合いのなかには、ともすれば「結婚」の二文字をちらつかせる人もいる。

当然そうしたいでしょう？、と言わんばかりに。そこには、まるで私が甲斐性のない男に待ちぼうけを食わされているようなニヤンスが込められている。冗談じゃない、この私が「待ちぼうけ」なんて状態に甘んじると思うなんて、アマイね。

私の母は「早く落ち着いてちょうだい」とたまにつぶやいたりするが、私は「えー？、落ち着いているよーん」とか笑つて済ませている。

最近、ちよつと考えた。私のほうが収入が多いんだし、「好きなことは続けていいから専業主夫にならないかい？」なんていう話も、おもしろいかなー、なんて。

だけど、やっぱり私には無理である。子どもの頃、「誰に食わせてもらつてると思つてるんだ！」をさんざん言われたお陰で、



他人様の収入で食うなんて考えただけでも身の毛がよだつような体質になってしまった私が、他人にそれをさせるというのも、やはり至難の業なのである。

子どもという身分での体験に囚われているのかもしれないが、私のなかでは、食わせるということは口をふさぐということと同義なのである。たぶん専業主夫契約なんかしたら、俄然、精神的マツチョぶり発揮して、ちよつと口論なんかになった時に、「誰に食わせてもらってると思ってるんだ！」をやってしまいたいそうである。

まだ一〇代の頃から、「絶対に君を幸せにするよ。家庭に入ってほしい」なんて言う男に限って、「誰に食わせてもらって〜」を連発するぞ、と思っていた。お前が絶対に幸せにするから外で仕事なんかするなって言ったくせに、である。私の体験に実例があるわけではないのだが、それだけは確信していた。

でもって、これは経済力から派生する権力構造なんだから、男だろうと女だろうと、金をより多くもっているヤツがエラそうに振る舞ってしまうことに差はないだろう、と思うのだ。

というわけで、もしも同居ということになったら、金のことでモメる原因はつくっ

ておきたくない。自分の食いブチは自分で。これは、人生の基本だと思っている。

もしも同居ということになったら、その後のほうが、「ケジメをつけてくれ」攻撃が大変なんだろう。そんなとき、往々にして、いつまでも「キチンと」しないのは男のほうを女を不幸にしているのだと見られてしまうんだから、男もかわいそうなものだ。もちろん、女もナメられたものであるが。

「ケジメ」のつけかたというのは、戸籍を移して、式を挙げて、挙げないにしてもせめて親族一同でお食事会くらいはして、つてことらしいんだが、式なんて恥ずかしいことこの上ないし（恥ずかしいというのは、照れくさいという意味じゃない。ペアルックとか子どもの写真がドーンと載った年賀状のように恥ずかしい、という意味だ）、お互いの友人には誰とつきあっているのか披露済みだから意味もないし、戸籍をいじくるのは、これまた考えただけで気が滅入る。私の名前を変えるのも相手の名前を変えさせるのも厭だ。法律婚の有利な面だけいたたくというのもひとつの考え方だけど、それ以前に、用紙に記入するのが、とてつもなく不愉快である。

この不愉快というのは、法律婚に断固反

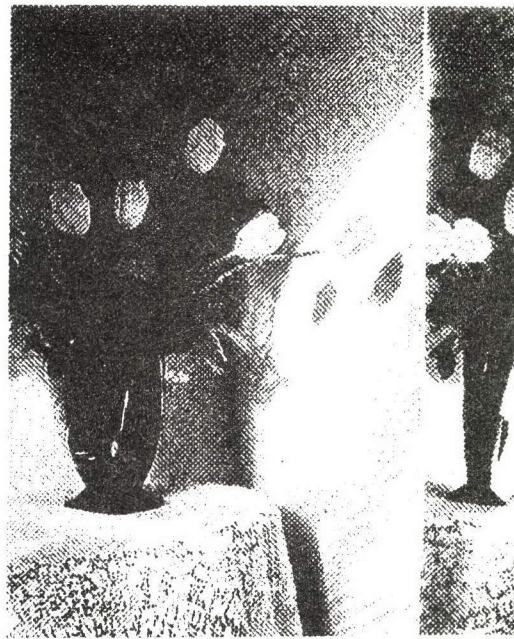


対なんていうほど強い主張に裏付けされたものではない。事実婚とか言っただけでやっぱり「結婚」なんだから妻であることに変わりはないでしょ、なんかやだよなあ、という程度のものである。

こんなことを言っていると、「子どもが生まれたらどうする」攻撃が控えている。



# 家族



子ども、ね。今のところ、産まない確率のほうが高いと思われる。子どもが嫌いだというわけではないのだが、妊娠・産後しばらくの、遊びに行けない、酒が飲めない、どれほど制度が整って助っ人に介入してもらっても手がかかることに違はない、自分の時間が激減する、一人になれる時間がない、なんてもう、考えただけでも（こればかりだな、さつきから）ダメである。

個人を一人、世の中へ送り出すなんて、そんなに簡単にできることじゃないし、私はそんなに人間ができていない。「子どもと一緒に成長するってことも、たくさんあるのよ」なんて言う人もいるが、だからと言って、それは子どもを産む理由にはなり得ない。

付き合っている人がいようとまいと、たった一つのコースを指さして私に何かを言ってくる人は存在し続ける。どれほどあれこれ説得されても、私は明確な反論などできないだろう。なんだかんと言ってくる人は、その人の思う方向へ私を動かすこと以外に目的はないのだし、私はただ、その人の思う方向に行きたくないことだけはわかっていてのだから。「あんたたちの思う結婚とか妻とか嫁とかっていうの、私、好き

じゃないのよお」。それだけだ。非常にイーカゲンである。

相方も「そういつた類いのことは、へいちばん大切なことじゃないよ」というイーカゲンなので、当人たちは何も困らない。スーブの冷めない距離で別々の住居に暮らし続けることだって、選択肢には含まれる。それを通い婚というのか、ただの恋人関係というのか、どっちだっていい。言いたい人が言いたいように決めてくれればいいことだ。ただし、私の耳が届く場所で、私の意にそぐわないことを言う人がいたら、「あなたの感性と私の感性は別物なの。おわかり？」ぐらいは言っておける。

好きにするんだ、私の人生なんだから。別に明確なビジョンがあって行動しているわけではないけど、後で泣くとか後悔するとか、意地悪としか思えないような勝手な予言をされるのだけはグメンである。

たぶん、こういうのつてもものすごくワガママなんだろうけど、このワガママを咎められても、女のワガママで社会が少しずつ変わってきたのだ。ウーマン・リップと良妻賢母像の間で揺れ続け矛盾を抱え続けてきた「母」たちの指し示すコースは、私には魅力がない——これが今のところ、私のワガママに与えられる唯一の理由である。



# 二六歳現在の、私にとっての「家族」

## ぶりしら

先日、新宿駅の公衆電話で「現代の置き人」というカードを拾った。お金を出せば、「恨みをはらしてくれる」らしい。ほっとそれをながめながら、一〇〇万円くらいですむのなら、家族を殺してくれないかなと真剣に考えていた。

自分の家族のことを尊敬していると愛しているとかいう人々は、嘘つきか偽善者かに違いないと、二〇歳のころまで真剣に思っていた。

ところが家族のことを大嫌いとか死ねばいいという私こそが、嘘つきか偽善者かに違いないと思われていた。

あるいはそこまで嫌うのならば、たとえばきつと内田春菊の「ファザーファッカー」のような家族なのだろうと、人は考えるらしい。

残念ながら、私の家族はごく平凡な代物で、埼玉の一軒家に住んでいる、出世とゴルフとカラオケを愛す公務員の父と、生協活動やPTA活動やパートやカルチャースクールに精を出す母。それから、一九の時に家を出て、同居人と暮らしている私と、やはり二二の時に家を出て、デザイナーの卵をしている弟の四人である。

そこその問題はあっても、むしろ「いい家族」であると思われるし、何よりも父も母も自分たちは「幸せな家族」だと信じ込んでいる。

私にとって地獄のような数々のエピソードも、人には受けるし、私の「家族への愛情を感じる」ものだそうだ。

たとえば、大学受験を失敗したとき、母は目の前で赤飯の米を流しに捨て、父は「俺の人生で最大の挫折だ」と言ったこと。

同居を始めることを告げたときは、さぞや怒り狂うだろうと思ったものの、父は私のことを「男嫌いでオールドミスになると思っていた」そうで、「結婚のようなものだから」と祝杯をあげたこと。

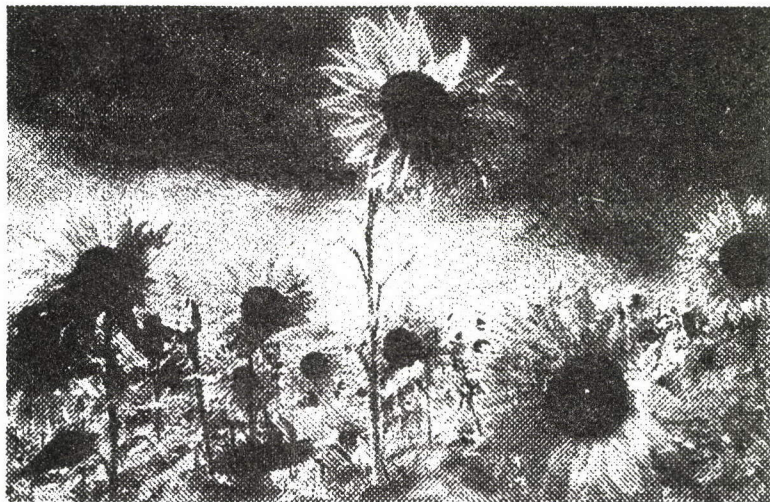
同居人を紹介する食事会では、父は自分がいかに権力を持っているかしか語らなかつたこと（「高級レストランで食事をしたときに、パンが出てくるのが遅いので、支配人を呼んで叱りつけてやったんだよ」などと自慢げに語り続けていた）。

去年、父が昇進したとき、家族で彼の職場に連れていかれ、建物の前や彼の個室で記念写真を撮らされたこと（私は二六歳、弟は二三歳なのに、だ）。

母からは、二年くらい前までは「あなたの同居は自己満足に過ぎない」という手紙を受け取っていたのに、一年前には「あな



# 家族



たのことを私は尊敬しています」という内容になり、とうとう「あなたがいてくれることが私の生きる喜び」という手紙になったときには、心底ぞっとした。この二年間に彼女が翻意するようなどんな出来事が起こったのか、私にはまったくわからないし、わかりたいとも思えない。

この数年はめったに実家には帰らない。帰っても、二四時間以上の滞在は苦痛で絶対にできない。母には恐怖心（ミザリー）に対する恐怖心（でも言おうか）しか感じないし、父のことは単純に軽蔑しているので、彼とは何の話題も見つからない。

どんなに仕事がつらくても、同居人とトランプがあつても、「実家に帰る」というオプションは私の人生にはない。もし私が病気や事故にあつて、父と母以外にだれも面

倒を見てくれないなら、簡単に死を選ぶだろう。

いつまでも「子ども」の位置にいて彼らを憎み続けることがいいことだとは思っていない。そもそもここまで負の感情を持つことは本当にしんどい。

彼らが「家族」という存在でなければ、ここまで思わなくてすんだのに、と思う。家族を過剰にすることしかできない父と母と、その家族の過剰さに耐えられない私と。

いつか私も、あのころは若かったと思えるのか。年老いた両親の前に、庇護の愛情が生まれるのか。そうすることが「大人」なのか。

少なくとも、自分自身が親になるという選択肢だけは、私にはない。



# できるものなら、結婚したい

掛札悠子

「家族」ねえ……。考えるだけでめまいがするわ、私。だって、「家族」っていったいなんだか、さっぱりわからないんだもの……。

一月三日、昨年来の「同性愛ブーム」をひきずって、朝日新聞に今年最初の同性愛者が登場した。連載「縁あってふたり——家族について」。その第二回が一月三日、

「男どうし・女どうし」、キャッチコピーは「恋人、でも結婚できない」ときたもんだ。

この記事をめぐっては昨年末、「『家族』についての連載をするんですけど、誰かレズビアンのカップルを紹介していただいただけせんか」というお問い合わせをいただいた経緯あり。私めはお断りさせていただいた。なにしろその直前に、前号で二本木由実さんが書いていた朝日の男記者（この時代に「悪女はささやく」なんて、アホな連載する

やつがいるか？ まったく）のボケぶりに遭遇、疲れきっていたのだ。まあ、私は断ったが、その後、「まな板の上の恋」を書いた出雲まろうさんのところへ話は行つたよ。うで、ゲイ二組、レズビアン一組で構成されたこの記事は、まあまあのできになっていた。よかつた。

ま、記事のできは良かった。だが、いまだどうにも落ち着かないのは、この記事に限らずそこかしこで、同性愛というシロモノが「新しい関係の形」「新しい家族の形」とか言って持ち上げられていることである。「縁あってふたり」を担当した女性の記者さんも電話で、「新しい家族の形として……」とおっしゃっていた。うむ。

つまり。

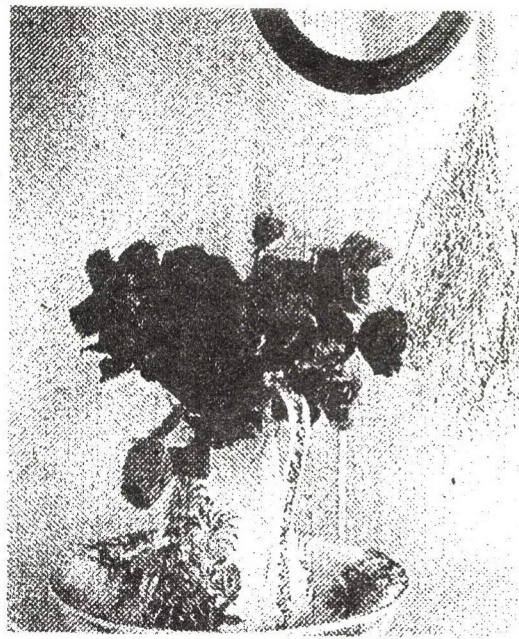
「絶対、『家族』になれない関係を、勝手に『新しい家族』とかなんとか言うの、や

めろよな」、これなんである、私の気分は。特に事実婚や非婚と同列に扱われると、正直言って非常に腹が立つ。あちらさんは、「選べるものを選ばない人たち」である。だが、こちらは「選びたくたつて選べない人たち」である。「選べるものを選ばない人たち」は、選べない理由をきちんとわかつてやっている。でも、「選べない人たち」に選べない理由はわからない。それどころか、選べないんだから、「自分は選びたいんだらうか」と考えてみることもさえない。その「選べない」事実を軽視して、あたかも「選ばない」かのように扱うのはやめてほしい。

たとえば、「縁あってふたり」の中で、ゲイの男性が言っている。「結婚も二人の子どももない。いつでも終わられる関係だからこ



# 家族



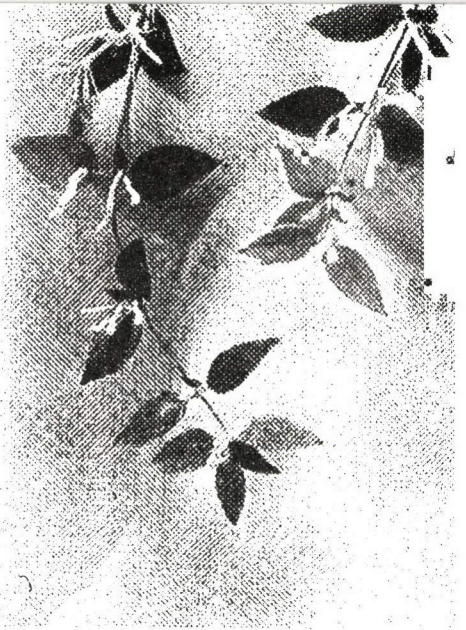
そ、できるところまで努力しようと思ったんです。この言葉を、「選べる人たち」(選んだ人も、選ばなかった人も)はどう受け止めるんだろう。バカにされてるとは思わないのかね。バカにされてると思わない人は、かなりのアホだと思うよ、私は。だって、「婚姻届を出しちゃってるし、子どももいるからこそ、別れられないんだよね、ヘテロは」と言ってるんだもの。

でもね、一方で私は、彼が言う「いつでも終われる関係」なんていやだと思うわけ。「できるところまで努力しよう」とも思いたくない。ぬるま湯で、一緒にいるのがあたりまえで、緊張感なんてカケラもない関係がいい。とにかく、恋愛はメンドくさい、緊張感と幻想あふれる恋愛に使うパワーがあるんなら他へまわしたい。だから、ススんでる同性愛者やススんでるヘテロにバカにされてもいいから、「ぐーたらで、カスガイにできるモノなら、法律でも子どもでもなんでもOK」の「家族」を作りたい。ヘテロだったらそれを選べるのに、私がレズビアンだからというだけで選べないのは、

おそろしく不公平。

え? 「結婚なんてするもんじゃない」だって? 忠告ありがと。でも、それを決めるのは私だから。それに、女と女が結婚できるようになるってことは、日本の社会全体が根本から変わるってことだもの。天皇制も民法も戸籍制度も今のまま、女同士、男同士でも結婚できるようになるってことは、絶対にありえないからねえ。だったら、同性愛者だからって、自立願って強がって、ムリすることもないんじゃないかと思うわけ。

まじめな話、時折、三〇年後、四〇年後を想像してゾツとする。義務もないかわりに権利もない関係に、そのころ、どんな問題がふりかかってくるかを考えると。そうすると、とりあえずは先の出雲さんのカッブルみたいな、二人の間で同意書類を作っておくしかないんだらうなあとと思う。財産(お金があるわけじゃないけど)の行き場と骨の行き場と死に方。こればかりは、それこそ明日やってくるかもしれないものだからね。



# 私のヘラヘラ闘争方法論

小口容子

先日、飲屋で友人に、「結婚したときって、いろんな人からボロクソ言われてさア、それでペーパー離婚したときも非難されて……」って話を、実名を挙げて、誰がどのように、あからさまに、暗に、言葉の端々に非難したかということ熱心に説明したら、「被害妄想じゃないのオ」と笑われた。私も最近、結婚に関する人の言葉の端々に「こりゃあ悪意があるに違いない……」と反応してしまおう自分って、CMをビデオに録画までしてヘセクハラCMを血眼になって捜している「コマーシャルの中の男女役割を問い直す会」の人のようだ、とフト思うことがある。

会社勤めをしているような、社会に適応している人の結婚観は、古色蒼然としても、制度を肯定しきって何の疑問を感じていなくても、ひねくれていないので無邪

気かわい。私の結婚を非難した、「既成の結婚観や家族観」を嫌っているような社会不適応者や社会反抗者の言い分は、始末が悪い。もちろん、彼らに戸籍制度や女性差別問題の素養がまったくないのは銀行員と同じなのだが、自分はそれ（既成の婚姻制度や家族制度）に与しない、という制度に対する思い入れの強固なことは、不思議なこと、制度や慣習を重んじる人代表の（親・親戚）の、「式はあげなくちゃ、籍は入れなくちゃ」という思い入れの強固さに匹敵している。

彼らが折にふれ、「結婚したんだから」「結婚するっていうことで生じる責任が」「結婚したら自由は制限されるから」と発するセリフの不自由さ・頑なさを、私はいつも「えっ、なんで？」という素朴な疑問符で思い返していた。彼ら・彼女らの誰も、

その（結婚）を経験していないからできる非難ではあつたけれど、それは（結婚）を特別視・神聖視する結婚式場の宣伝と内容は違わないと、私は（非難されている身としてやむをえず）ヘラヘラしながら反論もせず思っていたし、そういう理由で結婚しないアンタは、なるほど筋が通っていてエライわよ、と謙遜していた。しかし、そういう意味で結婚を悪者扱いすることは、結局、（既成の結婚観）を補強する側でしかないんじゃないの、反対して、それをしないで済む結婚ってのは、うつつとおしい、嫌でも社会性を持たされてしまう通過儀礼だ、ってのは、私のしている結婚とは、違うんだけどなあ、私は私で勝手に結婚やつてるだけだよ、と言っても、彼らは聞く耳を持たないのだ。

ことが結婚問題になると、このように私



# 家族

はフニャフニャ頼りない。「結婚を否定しているアンタのその思想は、結婚を肯定する封建思想を存続させるもんでしかないのよ」二、と正面切って批判ができない。それは、彼らの言葉の端々に過敏に反応してしまふ私こそが結婚にこだわっているという自覚があり、それが恥ずかしいからだ。私は運動ノリが嫌いなので、制度がなんとかって、つい言い出しちゃう自分がイヤなのだ。結局、ペーパー離婚したことも、制度にまじめに対応している私ってことで自慢をしたいが、恥ずかしい。フェミニストとしても風下でヘラヘラしているしかない私は、立場なしである。

あるとき、結婚否定派の代表である友人(男)から電話があった。友人はアダルトビデオ制子会社で、ビデオの制作をしている。

世間並に言えば、アダルトビデオを撮るなんてことは人間のすることではないと思っ  
ている人が多いので、彼は立派な社会不適  
応者である。本人も過剰なほど、それを意  
識している。ただし、マイナスではなく  
プラスに、である。つまり、彼は凡人には  
やれないことをやっているという自負があ  
るわけだ(この「凡人」には、アダルトビ  
デオをつくっている多くの凡人も含まれ  
る)。私はアダルトビデオも文化の一つであ  
ることと思うし、職業に貴賤はないしね、と  
思うが、とりあえずここでは関係ない。

彼曰く、「人妻を集めて、白黒ショーを見  
せて興奮させて男優とやるところをドキュ  
メントで撮りたい。好みの男優を容易する  
から出てくれないか」。私は頭が痛くなつた。  
まともに対応すると絶対ケンカになるので  
婉曲に断ろうと思つて、「人妻って定義が気  
に入らない」「あたし、別に欲求不満じゃな  
いんだけど」と、のらくらかわしていた  
が、相手もだんだんつつこんでくる。なに  
しろ相手は自分の作品に自信を持っている  
ので、「アダルトビデオになんか出演するか  
っ」と言ってしまったら、こっちの負けな  
のである。「フン、所詮、小口は幸福な結婚  
をして安定しているから、冒険はできない  
んだよな」という冷笑が待っているのはわ

かり切っている。その冷笑を、そんなに避  
けたい私も情けないが、こは負けるわけ  
にはいかない。

ついに話は制度に及んじやつて、相手は  
一言、「なんだよ、フェミニストみたいなこ  
と言っちゃつて」。パカヤロウ、私は昔っか  
らフェミニストなんだよ、アンタが気づい  
てないだけで。

しかし、五年前、女と痴話ケンカをして  
いたときに「○○君は封建的だから」と彼  
女に言われ、「ホーケンのつて、何？」と問  
の抜けた答えをして一挙にその場の緊張感  
を高めた彼にしては、フェミニストという  
言葉を知つていただけで感心すべきことだ。  
おそらく、アダルト業界でフェミニストに  
批判される出来事があつて、それ以来フェ  
ミニストは憎むべき存在になつたのである  
あろう。どうでもいいけど。

人妻↓欲求不満・刺激を求めている、と  
いう見事に陳腐な図式をヌケヌケと提示し  
ちゃうぐらいだから、そりゃ結婚は否定し  
たいよね。このように、話のわからん奴ら  
とヘラヘラ闘う私は、実に大変である。ま  
ア、世の中話がわかる人ばかりじゃ、や  
ることなくてつまんないしね、私は私、と  
いうことを一般論にすり替えず主張してい  
くしかないんじゃないだろうか。

# 「少女マンガ時代」

佐藤雅樹

少女マンガを読み始めたのは小学校時代だった。なれそめはまったく思い出せないが、いつの頃からか「プリンセス」を毎月購入するようになっていた。その中に、青池保子の「イブの息子たち」という連載があった。おそらく、この作品こそが、少女マンガにおける同恋愛表現との出会いだったのだろうと思う。この作品には、わけのわからないパワーがあった。男同士の恋愛が、背徳どころか絶賛されていたし、ここでは女は怪物であった。

自分のセクシャリティを自覚したのはいつの頃からだったか？ 小学校の高学年ではすでにその兆候が濃厚に浮かび上がっていた。しかし、性の対象が明確になったのは、性欲がくつきりと形を成した中学校一年生だった。

その頃にはもう、それが「異常」とされているものであることを知っていた。実際に僕はイジメられっ子だったし、「男らしくない」というだけで排除されるのに、ましてや「男が好きな変態なんて」と絶望していた。中学生にして、「自分には一般的な幸福は持てない」「家庭とは縁がない」「孤独な一生」などということを実感し、どうやって生き延びたらしいのか途方に暮れていた。

自分が自分らしくあろうとするとイジメられる。嫌われる。なによりも、僕自身がそんな自分を肯定できなかった。周囲のレッテル・価値観をそのまま引き受けてしまい、「男らしくあれない自分は、気持ち悪い人間なんだ」と思い込んでしまった。「気持ち悪い」という言葉が聞こえてくるたびに、追い詰められたように脅えた。

あの頃の僕は、少女マンガと宗教だけが生きがいであった。可愛い自分が男から愛される物語を読むことと、神に祈ること、それと大人たちから誉められること（なにしろ中学生が周囲の反対押し切って信仰してるんだから、こんな泣かせる話はない）で、自分を保ってきた。

少女マンガの提起する「愛こそがすべて」というテーゼは、男にひかれてしまう僕の欲望を否定しなかった。それだけでなく、男から愛されない、社会から受け入れられないことに絶望していた僕にとって、「愛される物語」は、たとえそれが現実逃避であったとしても、一〇代のゲイ少年が生き延びるために必要な逃げ場であった。

同じく「愛」を訴えてはいても、宗教の方は同性愛について否定的だった。そもそも同性愛に限らず、子孫繁栄以外の欲望はどれも



# 女も男も知りたい

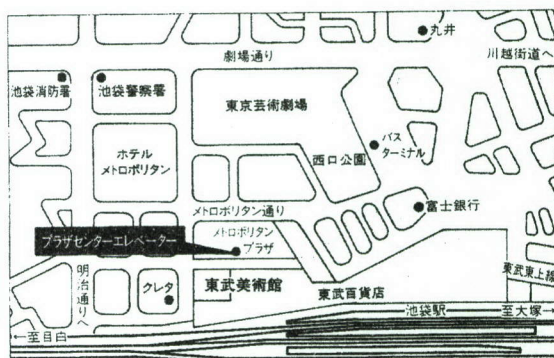
## 「男のSEX」

『恋愛の基礎』(ピックコミック  
(スピリッツ連載・小学館)のキム・ミョンガン AND

『男でもなく 女でもなく』(勁草書房)の蔦森樹

僕だって性について悩んだ/正しい性欲はあるのか?/男のコケシはコカンにあり/男は本当にポルノが好きか?/セックスの快感ってナニ?/インタコースは地下の食堂/快楽のデパートを探求せよ/快感は心身を浄化する/セックスはエネルギーの交換/すべては細胞に支配されている/生涯最高のセックスとは?

とき 2月22日(火)午後6時30分~8時30分  
(6時開場)  
ところ エポック10(豊島区男女平等推進センター)  
JR池袋駅(西口南側)メトロポリタンプラザ10F  
\*駅からはホーム南端(新宿寄り)の「メトロポリタン口」、  
プラザ内は「センターエレベータ」で10Fへ  
参加費 1000円



巷に性情報は氾濫し、男たちは猥談をしているけれど、自らの性について学ぶ機会がほとんどありません。そのため、男たちは性を自分の問題としてとらえにくくなっています。一方、女たちは性について、大らかに語るようになってきましたが、男たちが性についてどんなことを考えているのか、本音がわからないという状態です。

性の問題について真摯な発言を続けている2人の男性、「発情は恋愛の基礎、敵は本能にあり」という明るい謎の性人類学者キム・ミョンガンさんと、ジェンダーの先を問う新作「男でもなく女でもなく」が好評な作家、蔦森樹(つたもりたつる)さんを招いて、「男のSEX」についてじっくり語り合っていました。

<主催> 女と男の性の「共立」をめざすネットワーク  
<共催> 「有害」コミック問題を考える会  
TEL・FAX [REDACTED] (笹倉)







認める気がなかったようだ。

そんな環境で自分の罪を自覚し、祈ることで許されることを、そして救われることを期待していたのだ。いつか、王子様が現れて愛してくれることを望みながら。もしくは、醜いアヒルの子のように、片輪でない本物のお姫様になることを。さらには、自分がお姫様から立派な王子様に生まれ変われることを。

高校生のとき、美術部の女の子から山岸涼子の「日出処の天子」を借りた。同時に雑誌「LaLa」の存在を知った。当時の「LaLa」はとても充実した少女マンガ雑誌で、山岸涼子の他に、成田美奈子の「エイリアン・ストリート」、大島弓子の「綿の国星」、世界のトップモデルが実は美少年だったという「マルチエロ物語」、さらに木原敏江の「摩理と真吾」なども連載されていた。

とくに「日出処の天子」と「摩理と真吾」で描かれる、凄惨なまでの主人公の孤独に、決して報われない男への想いに、深く共感して、はまり込んだ。そこでの男同士の愛は「報われない愛」であり、それゆえにこそ崇高な愛でもあった。

未来に何の希望も見いだせず、かといって、自殺するにはあまりにも現世の幸福に未練があり過ぎたあの当時、月1回の連載の続きを

読むことだけを、とりあえずの頼りとして僕は生きていた。

僕は少女マンガと出会えて幸運だったと思う。ゲイの友人と話していて気づいたことだが、僕は男を愛することの罪悪感を持っていない。僕にとつての不幸は、男を愛することではなく、男を愛することが社会から受け入れられないことである。つまり、「排除」感だ。そこに関する絶望は深くても、自分の欲望自体を嫌悪するにはいたらなかった。それはすべて、少女マンガのおかげである。

少女マンガから、たくさんのもを受け取った。単純に「愛される」夢を見ることから、「愛すること」(おかげで対幻想がバリバリになってしまった!)まで、さらに、SF・怪奇・伝奇への関心、古代史や西洋史など歴史のおもしろさ、また、社会の価値観を疑うというものの見方まで養われた。つまり、僕がいま抱える価値観のベースはほとんど少女マンガによつてつちかわれたものなのだ。それだけのものが、少女マンガにはたしかにある。栗原さんが三〇号でおもしろいことを書いていた。たしか、「小説」を「文学とエンタテイメント」に分類し、その差を、現実の価値観に懐疑的であるか、そうでないかで分けていたのだ。これを、少女マンガにも当ては



めると、同性愛を装置とすることで、少女に新しい関係・感覚を提起しようとした二四年組などの作家の作品は「文学」ということになり、彼女たちが生み出した新たな価値観を「型」として無批判に前提としたヤオイや、あふれるホモネタ少女マンガは「エンタテイメント」ということになるのではないか。

「エンタテイメント」としての少女マンガが悪いと思わないし、決して嫌いではない。けれども、既成の価値観に挑戦するような「文学」的な志を持った作品がもっとも好きだし、そんな作品がいくらかでも存在することが少女マンガ表現の可能性を広げている。

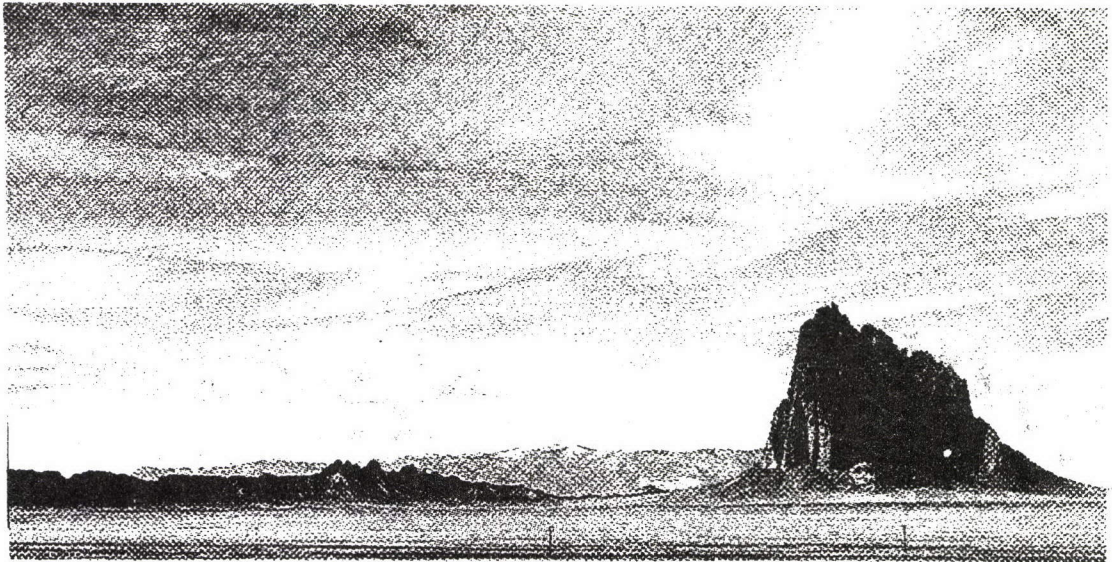
しかし、最近では、こうした「文学」性の高い作品を掲載する雑誌が売れなくなっている。二四年組作家の木原敏江や萩尾望都などが連載する「プチ・フラワー」が月刊から隔月刊に変わったし、大和和紀・里中真智子が歴史マンガを連載していた「miniエクセルント」もついに廃刊となってしまった。若い子たちの話を聞くと、こうした「文学」的な作品は難しすぎて読めない、そうだ。対照的に、ヤオイのような同人誌業界はマーケットとして栄えている。

商業的には「エンタテイメント」性の高い方が売れるのは当然だろう。それはそれで構わないのだが、「エンタテイメント」が「文

学」を、つまり、現実の価値観を擁護する作品が、そうでない作品を追い詰めるほどに肥大してしまうのはイヤなのだ。視聴率に追われるテレビがそれだけを基準に回ってしまうのと同様に、少女マンガも頽廃化しつつあるように思う。

文化は受け手がいないと減びてしまう。どれほどいい作品があったとしても、資本主義の世の中では買手手が支えなければ姿を消してしまう。僕は少女マンガを愛しているし、思も感じているので、「退廃なんかしてほしくない。そんなことはイヤだ！」と文句を言っておきたい。それは自分勝手な思い込みでしかないかもしれないし、「昔はよかった」風の懐古趣味でしかないのかもしれない。それでも、黙ってなんかいられない。僕がこんな面倒な論争を一年以上も続けてきた理由の半分はそれなのだ。こうした「思い込み」を出し合って、ぶつけていくことで、文化は守られ、育まれていくのではないだろうか？少女マンガはいまや、偏ったファンタジーに肥大していると思う。

せちがらい現実を生き抜くためには、おいしい幻想は必要かもしれない。かつての僕のように。しかし、幻想は偏り過ぎると、現実の問題を温存してしまい、さらなる破綻を抱え込んでしまう悪循環を作りかねない。とく





にそこに、女性差別を保持してしまうようなからくりがあり、さらにゲイ差別まで生み出してしまふなら、やはりダイエットが必要なのである。

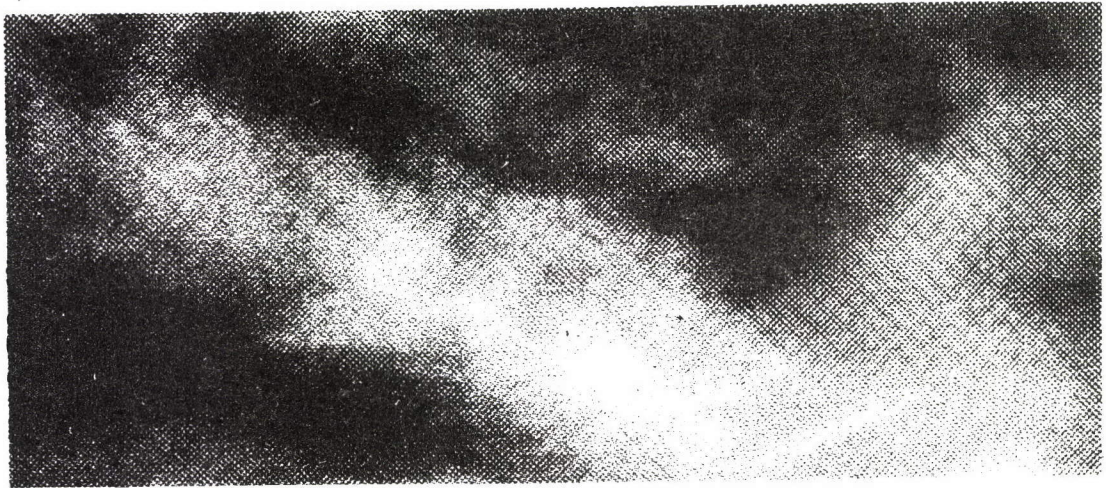
僕は、現実を生き抜くためのファンタジーがほしい。現実を生き抜くための一時的な現実逃避ならほしい。けれども、逃避すること、現実をなお生ぎにくくするような、自分を自閉させるようなファンタジーなら、ほしくない。

いろいろと遠回りをしたおかげで、僕がゲイのコミュニティにたどり着いたのは二五過ぎてからだだった。それまでは、ゲイの男とあったことがない。

それからは、自分には縁がないと信じていた男との恋愛も何度か経験してきた。その実体験の中で、少女マンガとのギャップを実感した。

現実の男は、大多数の少女マンガで描かれる姿とはまったく違うのだ。

男同士の恋愛は、少女マンガで賛美されるような美しいものではなかった。そもそも、マッチョな思考が骨の髄までしみこんでいる男同士の関係には、女の子たちが夢見るような「対等」な関係なんて、ヘテロの関係と同じように、ほとんどない。「男同士だから分



かりあえる」なんて、やっぱり幻想でしかない。隣の垣根はよく見える、つてなもんである。むしろ、男同士の方がはるかにジェンダーに縛られているかもしれない。だって、ゲイのモデルって、ヘテロの関係しかないんだもん。自分たち自身のモデルをまだ手にしていないんだもん。

恋愛において、相手との「関係」とは、けつきよく、自分で築いて、獲得していくしかないのだ。

そう気づいたとき、少女マンガと少し距離がとれた。別に「卒業した」などと言うつもりはない。「物足りなくなつた」だけのことである。物足りなくなつた人間の選択肢は二つある。もっと別の刺激を求めるか、「足りない」ものを「足して」いくか。僕が「少女マンガにダイエットを」で、「やおい論争」の中で行っていることの半分は、後者の作業である（もう半分は次号で語ります）。

少女マンガに物足りなくなつた現在でも、僕は少女マンガを欲している。もちろん、いままでは以前のような救済をそこに求めている訳ではない。気持ちよくファンタジーを楽してみたいのだ。それだけなのだ。そのためには、何が自分にとって心地よいファンタジーなのか探らなければならない。そして、何が自分にとって不快なのかを。



三〇号で「やおいから降りる」宣言をして数カ月、自分のなかでは綺麗さっぱり整理がついて、新たな創作の目標も決まり、その際に、今まであまりにもぬるま湯に浸かっていたために己の技術の無さを自覚させられることがなかった事実にも反省し、日夜、会社のメモ用紙や隣の統一協会が配るチラシの裏に電話機やら天井の梁やらスケッチしていたりするという充実した日々を過ごしている。

というわけで、今さらやおいについて何も言うことないんだよね。私が言いたいことや気づいた部分はほとんど栗原さんが、私なんかよりもはるかに冷静に、そして愛情をもつて書いてくれてる。今の私ときたら、以前は絶対いやだと思っていた「いったん踏絵ふんじやったら、弾圧側に回っちゃった人」になりつつあるんだから、もつと攻撃されてしかるべきなのかもしれない。

ただね、少し違うのは、私がふんだ踏絵は綺麗なマリアさまじゃなくて、そう思い込んでいた、ただの板切れだったんだよ。しかも、裏には釘が打ち付けてあって、持ち返す手で簡単に誰かを傷つけることができるんだ。板切れが板切れにしか見えなくなっちゃった

ら、もうそこに信仰を呼び戻すことはできないよね。偶像礼拝者だった自分を許せるまでには、まだちょっと時間がかかるかもな。

そんなんで、なぜまだ私がやおいについて何か語ろうとしているかと言えば、前回の文を読んだある人に二つ感想を言われたので、一応それに答えたいと思ったから。それは、「なぜやめようと思ったか、具体的な理由がよくわからない」と「あなたは女の病だと思えるか？」である。

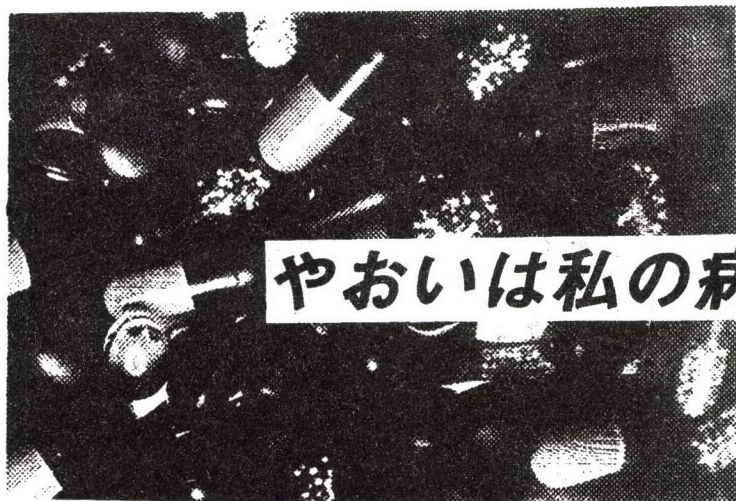
なぜやめるに至ったか。これはもう、私、〈文章の脳なし〉なので、ひたすら事実を羅列してきますよ。暇な人は校正しながら読むがよろしい（添削でも可）。

まず、一年近くもやおい論争を読みながら頑なに自閉し続けた私に、ある時、偶然に佐藤雅樹さんに会う機会がおとずれて、それが、よりにもよってゲイとレズビアンとの討論会の席で隣合わせになってしまったのだ。やおいをやるレズビアンなんて、最初、佐藤さんは驚いてしまい、私もはつきり言って、ゲイと対峙するのは初めてだった。さすがに生身のゲイに向かって「私やおいやってます」なんて言えるかあ？ でも私、言っちゃったんで

## ■ やおい論争 ■

# やおいは私の病である (前編)

絵理子





すね、これが。

そのころ、CHOO-SIRの二九号読んだシヨックがまだ尾を引いていて、なんとか高松さんを、ひいては私を擁護したい、佐藤さんを説得したい、と思っただけでしょうね。きつと鋭い言葉で切って捨てられるだろう、敗けるもんか、と身構えていた私の予測に反して、佐藤さんは純粹に疑問を投げかけてきたので、不意打ちを食らったようになってしまったわけ。それで私は、人を説得するため、論破するための理屈ではなく、本当に私にとってのやおい、それがなぜ必要なのか、いや本当に必要なのか、を自分の成長を思い起こして整理してみることにした。

私は正直言って、小学校に入る前からはつきり性欲というものを意識していたと思う。子どもがうんちやおちんちんを言葉に出して喜ぶのと同じように、おまんこに興味があったと憶えている。それも、前者が排泄器官としての意味性だとすれば、私は明らかに快楽器官としてのそれに興味をもっていた。ぶっちゃけて言うなら、自慰をおぼえたのね。

一番最初に興奮した記憶って、怖いことに二四年たってもはつきり憶えていて、それは女性をベッドに押し倒すチャールズ・ブロンソンの映画で、ベッドの下にブラジャーやら

パンティーやらが投げ落とされるシーンにはつきりと欲情していた。幼稚園の靴下げて帰っていた五才児が、である(祖母と母が慌て、しかもさりげなく、テレビの前に立ちはだかったよなあ。(笑))。早くおとなになって、こんな気持ちよいくがしたい、というのが一二才までの私の偽らざる願望だった。(特に女性の乳房が揉まれてるシーンはお気に入り、自分のべつたんこの胸が悔しくてしようがなかった。)

そんな、父親の「小説宝石」盗み読むのが大好きだった(純粹)な小学生の私の最初をつまづきは、(子どもの作り方)を知ってしまったことだった。それまで私はマジで、SEXが生殖行為だとは知らなかった。SEXはキレイなひと(私の見た映画の女性は当然女優なのでキレイに決まっているわなあ)のする、ちよつとHで気持ちのいいこと。子どもは、お父さんとお母さんが一緒に住むと、お母さんのお腹が膨らんでお腹を切って赤ちゃんを出してもらう……という認識。

ここで、私はとても困ってしまった。そのころまで私は、大人になつたらたくさんの好きな人とSEXしようと思っていたので(愛情行為であることも知らなかった。だって、愛し合ってる人って、恋人、やがて夫婦なんだから、夫婦ってことはお父さんとお母さ

んSEXしない人、なんだもん)、子どもができたら面倒じゃないか、それじゃSEXなんてつまらないじゃん!といったパニック状態になってしまった。

そこに追い打ちをかけるように、母が、中学生になった私にこう言った。

「女の人はね、できれば結婚したら家に入ったほうがいいのよ。仕事で疲れて旦那さんの相手をできなかつたら浮気されてしまうから。お母さんも本当に辛いけど、男の人は衝動をがまんできないからね」

そうか……。うちが四人兄弟だといったら嘲るように笑ったクラスメートの意味はこれか。シヨックなんてもんじゃなかった。ただでさえ酒乱気味の父親に嫌悪感をもっていたのに、だめおしで強姦者のイメージを植え付けられたら、このさきあたしはどうしたらいいわけ? とどめに、うちはキリスト教だから墮胎は重罪だ。強姦されても子ども生めつーのか!?

こんな経緯で、私の思春期はいきなりマージナルなSEX観で始まってしまったのでした。しかし、ずっと大切に育ててきた性欲が、このぐらいで消え去るだろうか?

以下、後編は、行き場を失った私の性欲がどこへ吐き出されたか、語っていきたいと思う。

# 広がるやおい論争

失われたやおいの黄金期を求めて

栗原知代

今回はもともと、やおいのいう「究極の愛」や「究極の関係性」が、実は「究極のナルシズム」なのではないか、ということを書こうと思っていたのだが、やめた。

その代わり、ここ一か月にもらった（人づても含めて）他の人のやおいについての長文の考察への、感想を書くことにします。その三つの文章は、わたしにとって非常に刺激になった。これまでいろいろ書くところで、やおい・耽美小説に関する文章を書いていて良かったなど、しみじみと感じました。

さてその三つの長文とは、まず第一に早稲田大学の人間科学部の学生とみいミカさんが卒論として書いた「女性による女性のための

男同士の恋愛物語」。これは少し形を変えて、同人誌としてコミケでも売られています。

次に現役やおい漫画家の天童渉さんが作った評論同人誌「特集やおい論」改訂版。この本の一部は、太田出版から出た「コミケ作家ガイド」に加筆の上再録されました。

そして最後に、本誌のやおい論争に対し、現役のやおい作家えのもとさんからの反論。彼女はこの論争を、「高松さん柳田さんやおい少女（正確には元・やおい少女）陣営VS佐藤さん色川さんそして栗原さんも含めた、反やおい、あるいは脱やおい陣営の論戦という形をとった一種の「やおいバッシング」だと感じ、主にやおいが現実逃避であるとい

う論点を中心に、徹底的な反論を展開しています。これは本来、友人の編集者に宛てられた私信だったのですが、量がまとまっているし、他人に読まれることを前提に書かれた文章のようなので、ここにとりあげることになります。えのもとさんには、是非シヨワジュール誌上で、この論争に加わっていただきたい。

しかしなにぶん、今回の文章ではこの三つ全部をとりあげることはできないかもしれない。最初のとみいさんのだけで、スペースが尽きるかもしれないことを最初にお詫びしておきます。

さてとみいさんの卒論同人誌の内容なので



すが、彼女は自称「おたくのおたく」（たぶん、何かに深くとりつかれている人たちに興味を抱く、という意味でしょう）で、中島梓の「コミユニケーション不全症候群」を読み初めて、やおいの存在を知り、非常に面白いと思って卒論のテーマに選んだそうです。そして即売会に足を運び、参加者にアンケートを依頼し、多数のやおいの子に取材し、現在出版されている耽美小説や同人誌、JUNEのバックナンバーを網羅するほどに分析し、卒論を書き上げました。実は彼女から、去年の4月に手紙をもらっており（それは「耽美小説・ゲイ文学ブックガイド」のわたしの文章に対する反論）そのときに彼女がそういう卒論を書いているというのは知っていたのですが、このたび完成したものが届きました。

さてこれは、力作です。耽美小説の設定がご都合主義的なこと、妄執ともいえる激しい愛を求める少女の気持ち、エロティシズムに直接触れるとやけどをするから「男同士」という皮をかぶる欺瞞性などが、みごとに立証されています。またそれが、かなりの数のサンプルから導き出した結論として、この世界に詳しくない人にも納得できる形で書かれているのが長所でしょう。

一点をのぞけば、彼女の導き出した結論は、わたしが各所で書いているやおいの分析と、

ほぼ同じなのです。

ところがわたしはこれを読んで、頭を抱えてしまった。正直にいうと、むっとしてしまっただけで、珍奇なモルモットのように扱われ、ここまで否定的な結論を出されなければいけないのだ！ 妙な話ですが、やおいのワン・オブ・ゼムとして、擁護論を書かなければ、と思ってしまったのです。

このわたしが！ たぶんやおいの人には、栗原のしていることと同じではないか、おまえがこの早稲田の学生を攻撃するのは、目くそ鼻くそを笑うだぞ、といわれそうだけど。

余談ですが、わたしはけっこう外部による、特に男性によるやおい攻撃には腹をたてていまして、大陸書房から出た「世紀末同人誌伝説」や、コミケのカタログに載った「いかさまスポーツ」などは、徹底分析して論破しています。けっきょく、この手のやおい攻撃には、必ずセットとして、「あるべき女性の姿」「普通の女の子」像が出てくるのですが、彼らにはそっちのほうに虚像であることの認識がないのです。彼らのいう「普通の女の子」が、男にとつての「普通」であって、けっして本来の普通でないことが。

結論をいえば、やおいだって、普通の女の子なんです。また、そうであらねばならない

のです。我がまま、高慢ちぎ、依怙地、臆病

……こういう通常では悪いイメージをかぶせられている形容詞も、裏を返せば知性とプライドのなせるわざなのですから、人間である女の子にはそれがあって当然ではないですか。スケベなことに興味を持つのも当然です。やおいはやおいのまま恋愛することも結婚することも可能だし、逆にその道を模索していなければならぬのではないのでしょうか。こういうと、お前のいつていたことと矛盾するといわれそうですが、わたしはやおいはやおいを卒業して恋愛をしるといっているのではなく、「普通の女の子」という仮面をかぶるのではなく、やおいのまま恋愛をしていって、結果として自己逃避から脱皮すればいい、と思っています。やおいである自分を、普通であること、正常であること、人間本来の姿であることとして受け入れるのが、現実逃避から脱皮する第一歩で、わたしはけっしてやおいを卒業して本来の自分ではない「普通の女の子」になれ、とはいっていないのです。

さて話をもとにもどすと、とみいさんとわたしの相違点とは、やおいをフェミニズムを見なすかどうかの一点に収斂します。彼女から送られてきた手紙のなかでは、わたしがC R E Aで使った「無意識のフェミニズム」と

いう言葉への反論が展開されています。実際、卒論同人誌でも、このことに言及されていません。彼女によるとやおいは「無意識のフェミニズム」ではなく、意識上のフェミニズムに無意識のシンデレラ願望が反逆した形、ということになります。

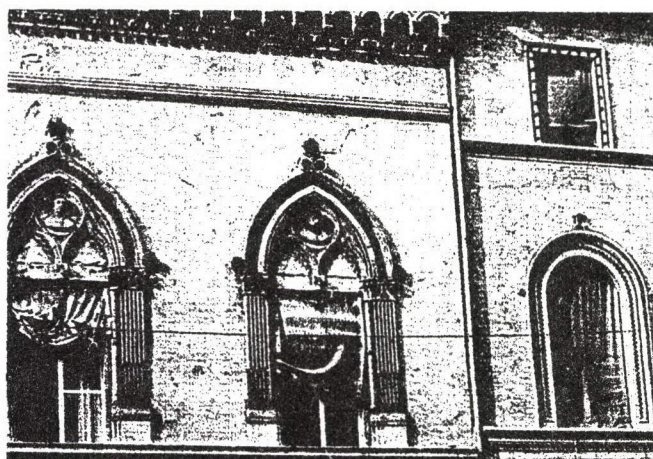
つまり、わたしの説では、社会の強制する「女らしさ」に反発を感じた女性が、「女」ではないものを模索する途上で、やおいを選択する。「男」と「男」という設定で、新しい性愛の形を実験するのが、耽美小説であるということになります。

とみいさんの説では、耽美小説のメジャーな読者は、女性性への違和感を持っていない。その証拠に、やおい小説のなかで展開されている恋愛は、古典的な男女関係をもっと極端にしたもので、そこに描かれている恋愛観は、非常に受動的で他力本願ではないか。彼女たちは、社会の変化にともない、自立することを意識上では望んでいる。しかし深く無意識に根を下ろしているシンデレラ願望は変わらない。その自己矛盾を解消する形式が、やおいなのである。

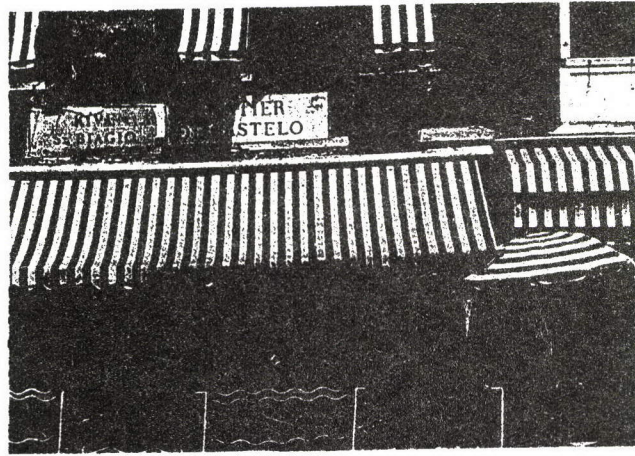
なぜこの違いが生じてくるか。簡単にいってしまえば、彼女とわたしでは見ているものがちがうからです。というより、彼女は広大なやおい世界のなかの、ほんの一部しか見て

いないのではないか。具体的にいうと、ここ数年の耽美ブームで浮上してきたやおいの上ずみ、やおいの最もメジャーな部分、最も保守的な部分しか見ていないのではないか。あるいは自説を立証するために、それと矛盾する他の部分を切り捨ててしまったのではないかと、思います。

端的にいえば、彼女の説に従うと、わたしはやおいではないことになってしまおうのです。ゲイ文学しか読まなかった二年前でさえ、わたしはご都合主義的なストーリー展開は大嫌いでした。性欲の自覚から逃避していたこともまったくなって、わたしがいちばん感動するゲイ小説のくだりというのは、主人公が追いつめられた末、自分の性欲を自覚し、自分の汚さや欺瞞性を自覚した上で、それ以外にほんとうの自分はないと受け入れていく過程でした。男同士の恋愛小説を、ファンタジーを規定した上で楽しんだことなど、一度もありません。わたしは本気で救われたかったです。ストーリーには論理性を何より重視しました。だって、傷ついている人が、リアルな設定で論理的に納得できる形で救われるのなら、自分の救済の道をそこに見いだせるじゃないですか。わたしはそういう小説を、エントテイメントではなく、思想書のように、真剣に読んでいたのですから。







たしかに今となれば、自分がやおいのなかでも少数派であったこと、右と左になぞらえるのなら、極左であったことはわかります。しかしとみいさんのような外部の人（彼女は自ら自分のことをそう規定しています）にいちばんわかつてほしいのは、わたしといわゆるメジャーなやおいの読者は、もちろんかなり離れた場所にいるにしても、その間は分断されているのではなく、連続的につながっている、ということなのです。

わたしが「耽美小説・ゲイ文学ガイドブック」の分類で、耽美小説の項に杉本苑子や村田喜代子を入れた理由はそこにあります。通常だったら彼女たちの作品は文芸で、山藍紫姫子やくりこ姫と并列に論じられることはありません。でも長年JUNEの投稿書評欄を担当していた経験からいって、JUNEの読者たちはけっして「耽美小説」だけを読んでるわけではないのです。福永武彦もE・M・フォースターも島田荘司もアリス・ミラー、平行して読んでいる。いくらそこに、自分の理想とする恋愛を見ていたにしても。

だから前者には、ご都合主義とか性欲からの逃避という非難はあてはまりません。ただしやはり、いくらちがうといっても共通しているものもあるのです。わたしはそれを問題にしたかった。女性作家や女性研究者、女性

評論家、女性学者のなかには、やおい的な人は多く存在します。とくに西欧の美術史や映画、幻想文学を研究している女性は、ほとんどそうじゃないかと思う。この問題を論じる際には、同人誌即売会に集う若年の少女だけを対象にしてはためなのです。とりこぼすものがあまりに多いから。

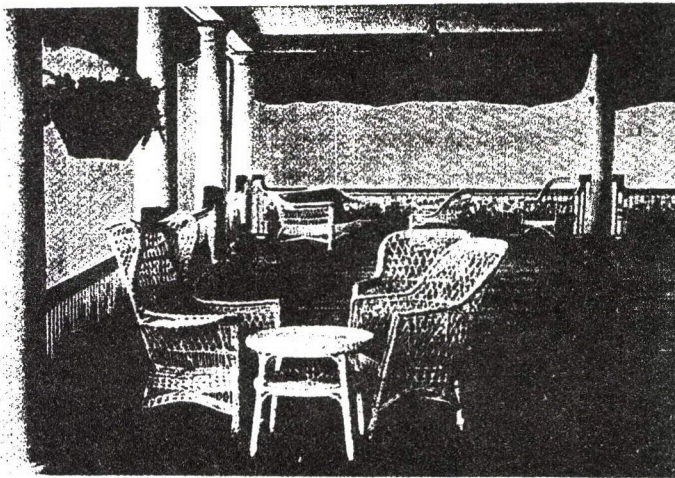
もしも自分に悪いイメージのレッテルを張られるのが嫌な人なら、わたしは「やおい」じゃないのよ、あの子たちとはちがうのよ、とつぶやねてしまえばよかったのかもしれない。でもわたしは、あまのじゃくなので、常に一番悪いイメージのレッテルを自分に張ることにしている。ひょっとして現在自称「フェミニスト」なのもその意識の表れなのかもしれない。ともかく、わたしは「やおい」だった。現在のやおいの狭義の定義では、はずれるかもしれないが、自分の意識ではまちがいはなく「やおい」だった。今の自分を作ったのは、「やおい」であった年月だし、「やおい」を通過しなければ、現在の思想は生まれなかっただろう。

だからわたしはとみいさんの論文を読んだとき、やおいのプラスの面、を再評価しなければいけないと思ったのです。そしてそれは、やはりフェミニズム的なもの、従来の男女の恋愛観に縛られないところに羽ばたこうとす

る力、理想を希求する態度、だと思う。いくらそれが現在ベストセラーになっている耽美小説から読み取れなかったにしても。

しかしこうなってしまったのは、耽美小説界の変化が原因なのではないか、とも思っています。つまり昔はこの世界がもっと混沌としていた。今のようないやおい黄金パターンは確立されていなかったし、攻めと受けという言葉もなかった。「小説JUNE」にしても、女同士の恋愛小説もあったし、小説として未熟でもひどくエロチックなもの、思想的なもの、文芸的なものと、玉石混交していたのです。

それがあつた時期から、受けないもの・売れないものは排除されていって、典型的な攻め・受けストーリー一色になってしまった。これは耽美小説作家、とくに同人誌作家が、思想的に先鋭化するのを恐れ、商業主義に日寄つたのが原因ではないかと思えます。つまり今の耽美小説界には、批評体系というのは存在しませんから、売上の数だけがものさしになるのです。五年ほど前、耽美小説が商売として成立するようになってから、売れるものが正義、売れないものは悪、という価値基準を、当のやおい作家たちが受け入れ、黄金パターンからはずれるものを自己規制してい



つたのではないのでしょうか。

耽美ブーム以後、この世界に群がってきた商業出版の編集者たちにとっても、売れること以外に、やおいの価値はありませんでした。したがって耽美ブーム以後、この世界は奇妙に均質化していったように思えます。わたしは同人誌界は詳しくないのですが、昔からいる人が時折口に出す、「キャブつば」と「聖矢」のころは、みんなが本当に燃えていた、という発言は、これを意味しているのではないかと思えることがある。

だから、もしやおい中毒の人が、よりよいやおいの出現を求めるのなら、批評誌の発行が急務です。作家を傷つける批評は許さないとか（これは「耽美小説・ゲイ文学ブックガイド」にきたお手紙の引用）くだらないごたくを並べている場合じゃない。

実感としては、ブームの来る前にひそかに存在して、商業主義の台頭と共に減びてしまった耽美小説のなかに、やおいの最も良質なもの、ほんとうに新しいものの萌芽があつたような気がします。

さてこのようにやおいを擁護すると、ではなぜお前は高松さんや柳田さんを、あれほど激しく非難をしたのか、という疑問を抱く人もいます。それはひとえに、彼女たち



をやおいの最上級生だと思つたからです。論争に足る相手だ。

わたしの場合は、やおいに関しては、あるレベルまでは肯定、ただし究極的には否定という二段構えの態度をとっています。それは前回の「駆け込み寺としてのやおい」のなかでも述べましたが、ゼロカマイナスの人間があるレベルまでやおいに浸るのは、けっこうなことだと思つているし、あるレベルまで——それは良質な女性向けのエンタテイメントということですが——はやおいも優れた作品を生み出す可能性があるということは認めています。ただし、究極的には否定しています。たとえば耽美小説のままで、他人の皮をかぶつているままで、文学になるかといえば、それはないと断言します。

この究極的な否定の要因は、わたしの場合二種類あって、ひとつはゲイそのものの思想の可能性に限界を感じている点、もうひとつは「男と男」という設定にしがみつく限り現実的には有効でないという、二点です。

まず前者についていえば、わたしはゲイ文学そのものに新しい可能性を見いだせなくなつてしまつたんです。つまり、わたしは対等でありながら、愛し愛される関係を模索していたのですが、ゲイのなかにもそんなものはないのではないかと思つてしまつた。またゲ

イの恋愛観も、結局は男の持つ恋愛観（支配／被支配）のエロティシズムに基づくもので、それを逆転したりカリカチュアしたりすることで、これまで不動に見えた既成の性愛システムを揺らすことはできても、根本的に覆すことはできないのではないかと、思つたからです。もちろんこれには異論のある人もいるでしょうけど。

後者については、ゲイのなかに新しい恋愛や家族の形式を見いだすというお題目を掲げて、自分のなかの逃避願望に目をつぶろうとする女性が多すぎるからです。わたしはその退路を断つために、非常に意地悪く、彼女たちの自己欺瞞を指摘していることがあります。たとえば『モリス』がいくら感動的でも、白人の上流階級の美少年という、世界の強者に感情移入して、黄色人種の労働階級の女という世界の圧倒的な弱者としての自分の立場を忘却して、その世界に浸つていもしかたがないだろう、と。

後者についてもうひとつという、たしかに耽美小説のなかにはフェミニズム的な意味で価値のある作品、女性の社会的な生きにくさをテーマにした作品はあるのだが、それがよくできていなければいるほど、わたしなどはそれが「男と男」という仮面をかぶつていることに不満を覚えてしまつたのです。これほど優

た作品なのに、なぜ？

花郎藤子さんのようにその点を十二分に意識した耽美小説家もいます。しかしいくら優れた作品を書いても、それは少女たちにしか読まれない。ほんとうに読ませたい人、それを読んで考えを改めてほしい世の男性には、その作品が届かないのです。だって耽美小説の編集者でもない男性が、「男と男」の恋愛小説を本屋で手に取るうと思つてしょうか？

ともあれ、『耽美小説・ゲイ文学ブックガイド』や本誌で文章を書いたことに対して、反応が返ってくることで、わたしにとつて嬉しいことはないです。また、このところ、やおい同人誌界でもこれまでの「誰にも迷惑をかけていないだから関係ないでしょ。わたしたちのことは他人にはわからないんだから放つておいてちょうだい」といった態度が変わつて、自らこの世界を分析したり記録に留めておこうとする動きが出てきたのは、歓迎すべきことです。

だからこの「やおい論争」に、どんどん参加してください。またカムバックしてくれる人がいたら、こんなに嬉しいことはありません。

一九九三年一月二日一八日土曜  
日、西麻布・YELLOW。三  
誌合同パーティ「エントロピー  
」が催された。

「宝島」に記事が載り、「ぴあ」  
にも案内が載ったとか聞いたか  
ら、当然その力が大きかったの  
だろうけれど、なんと参加人数  
三三七名。九二年末の倍の数字  
だ。怪我人もなく、トラブルも  
なく——おこげははびこって  
たけど——、とりあえず無事に  
終わってよかった、の一言。

自分をきっちり持っている人  
間が十数人も集まってひとつの  
ことをしようとするなかで、一  
触即発のスリリングな場面を迎  
えたこともあったけど、「今年も  
やってよかったね」と思えたの  
は、来てくれた人たちの笑顔  
を見られたから。

パーティ当日、とある人に尋  
ねられた。「ゲイとかレズビアン  
とか、そういうミニコミがあつ  
て、その呼びかけでこういうパ  
ーティがあるのはよくわかるの  
だけれど、あなたは どうしてこ

のパーティに主催者として携わ  
っているの？」

どうして？という問いに即答  
できなかった私に、その人は問  
いを変えた。「あなたが、このパ  
ーティで得たいものは何？」

# 宴

あ  
の  
と

でいいなら、他所にある。もち  
ろん、まだまだ場が少ないだろ  
うけど、他所がやっつてる。そう  
いった場へ私が参加することを  
許されても、あくまでも傍観者  
だし、他人事だ。ゲイだけで、

## 色川奈緒

しれない。セクシュアリティの  
ゴツタ煮を、本当にみんなが目  
指していたのかどうか、おぼつ  
かない。主催者の一人のくせに  
情けないことを言ってしまうが、  
そのあたりの意志確認を怠った  
のは反省することしきり。

そういう「目的」がありなが  
ら、準備の間みんなと一緒にい  
て、私はどこかでうまく溶け込  
めていない自分を何度か見てし  
まった。配慮と言ったらキレイ  
すぎる、ミヨシな遠慮が自分  
の中にあることを、再確認してし  
まった。特にゲイの連中に対し  
て。

「ゲイもレズビアンもヘテロも、  
その他いろいろあるセクシユア  
リティの人たちも、みんなゴッ  
チャで遊べる。私はそう答  
えた。これは、私の本当の気持  
ちだ。

レズビアンだけで、バイセクシ  
ユアルの人たちだけで、という  
場が自己肯定や仲間意識などを  
育む大切さはわかる。でも、そ  
れは私には遠い。

ゲイやレズビアン  
のパーティ

もしかしたら、スタッフの中  
で、その思惑がズレていたかも

余計なことなのかも知れない  
と思ひ、もしも余計なことなら  
余計なことをを気にかける自分  
は自然体ではないのだと思ひ、  
そう考えていること自体がみん  
なに対する距離を露呈している  
のではないかと、頭のなかでグ  
ルグルしてしまふ。  
そういう「不自然さ」は、た  
ぶん彼らのなかにもあつて、そ



の気遣いとかミヨーな遠慮にお互いに反応してしまおうと、取捨つけられなくなつて、笑顔もひきつってしまつのである。

男も女もなくて、ゲイもレズビアンもヘテロもバイセクシュアルも「わからない」の人もゴツチャで、つていうパーティがしたかった。それはたぶん、限られた場所・時間のなかで桃源郷をつくり出してみたかったという希望と、それに追いつかない現実の生活において欠けているものの確認だつたと思う。

前回もそうだつたけど、彼ら・彼女らといると、ひとつとつても楽なことがある。この社会で身体が持たされているへ記号が崩れてしまうことだ。みんなの身体はみんなの身体そのままで、いまの社会通念のなかに振伏せられた身体ではなくなる。もちろん、「見られる」もので、「触られる」ものだったりもするのだけど(！)、身体は身体であつて、それ以上でもそれ以下

でもない安心感があつた。いろんなものに替えてキヤークヤークの好みの確認につながる

イの翌日、マドンナのコンサートでまた感じた。それは賛否両論だつた「ガリー・シヨウ」の最終公演だつ



開場前の異様な(♥)スリー・ショット。パフォーマンスで王子様役だつた私は、懸命にメイクしたのに、どうしても男の子顔にならなかつた。

き込まれてしまつた。

写真集「SEX」もそうだつたけど、マドンナが作り出すものは、「いやらしい」ものではない。性別も人種も超えて身体が身体であることを、最近の彼女は前面に押し出してくる。(だから、かのアンドレア・ドウォーキンが「贖い」で訳者の寺沢みづほ氏があとがきで書いているような、「紋切り型のポルノに過ぎぬマドンナの「セックス」を、『女の主導で制作された女性解放のヌード』と脳天気な言辞で持ち上げ、権利ならなんでも弁護し、それによってお手軽な人権派の衣をまといたがる」という言い方には苦笑した。) もちろん、私があのパーティや、そこにスタッフとして関わつていた連中ともつ時間は、「日常」のなかには皆無に等しい。が、私は確信したのだ。それが、とても楽であることを。そして、その楽さを、もっと「日常」のほうに扱いたいという自分の願望を。

本誌二八号に載せていただいたインタビューの中で、私は事実誤認をしてしまった(p. 四~五)。つまり、田嶋陽子さんは、かねて「冠つきフェミニズム」を批判している側なのに、その肯定者であるかのように思い込んで喋ってしまったのだ。

『思想の科学』(五〇〇号)で駒尺喜美さん曰く、「真性フェミニスト、つまり、フェミニズム独自の立場に立ち切っている人は、私の見るところ、数人もいないと思います。その数少ない真性フェミニストの田嶋陽子の言葉でいうと、冠つきフェミニストが多すぎるのです」。

これを読んだ時、私はギョー天した(それがすべての始まりだった)。真性フェミニスト?! あの風通しのいい駒尺さんが、こっちが〇であってあちは×的な硬直した立場をとるなんて、信じられない……。

イキのいい女たちを、世間は勝手に「フェミニスト」とひとくくりにするけれど、当事者(?)ひとりひとは、それぞれにあのヒトと自分じゃモノの見方、感じ方がずいぶん違うな、と思うことがあるはずだ。思ってた前、違って当たり前だから、時に批判し合う。と私は思っていた。、というの  
は一。

駒尺さんの言ってるっしやる意味とは違うかもしれないが、日々の実感につながらない、記号化されたような難解なフェミニズム談義は、私もキライだ。「私の問題」を「私のことば」で語ることから出発しないフェミニズムは、なんかいかかわしい(世界でいちばん大切なのは、「私の問題」の解決なのだから)。

しかし、と言って、私がいがかわしくないわけではない。〈ありのままの私を生きる〉ということばだって、考えようによっちゃズイブンといかかわしいのだから。想うに、どかなふう生きようとも、ヒトはいかがわしさとまったく無縁になんか生きられないようにできているのだ。そんな〔しゃあない〕私たち——。

問題を正邪に分けて、カッキリハッキリさせ

たい欲望は、むろん私にだってある。しかしキラ・スキは気軽に言えるけど、正邪についてはどうしたって慎重になってしまう。そう、正邪を言わないのではなく、言う時は慎重に言おうと思うのだ。

さて、前述したように、「真性フェミニスト」とは「アンチ冠つきフェミニスト」のことだと、駒尺さんは言っておられる。が、そうかなあ。それって「冠つきフェミニスト」の新種にすぎないのではないか。新しいレッテルを貼りつけたグループが、またひとつ増えただけと違うの。

そもそも、「アンチ冠つきフェミニスト」自体、「冠つきフェミニスト」の一形態、ではないのか。「アンチ冠つきフェミニスト」という冠をつけた「冠つきフェミニスト」という意味で。

つまり、「冠つきフェミニスト」ってことばが、すべてを金太郎アメ化してしまうのだ(田嶋さんはそんなつもりでこのことばを考え出したんじゃないのに、ことばは一人歩きするからね)。

と、かように私は思ったわけです。つまり、「真性フェミニスト」=「冠つきフェミニスト」の新種だ、と。その私自身の「解釈」をベース

に、「田嶋陽子さんは「冠つきフェミニズム」って言っていますよね。(中略)大学教授っていうのは、理屈じゃなくて、もう立派な「冠」じゃあないですか?」、と私はインタビューの中で言ってしまった。田嶋さんは数少ない「真性フェミニスト」だからイコール「冠つきフェ

ミニスト」なんだと思い込んでしまったのだ。しかも「大学教授フェミニズム」云々なんて、余計なことまで付け加えてしまっ

て。そしてその上、今回、駒尺さんの文章で参照してみたら、「真性フェミニスト」が「真正フェミニスト」となっていた。字のまちがいに気づかず、勝手に「真性」を「真正」に直してしまっただけなんだ。返すがえすも、申し訳ないことです。田嶋さん、駒尺さん、ごめんなさいね。事実誤認と字のまちがいに、チャンと頭を下げて、いま誤っています。

## 本誌28号 インタビューに 関するお詫び

田中美津



# la VOIX de CHOISIR

## ■東京都(?)・匿名■

私はCHOISIRの一年くらい前からの読者です。友人に教えられて、いつもおもしろく読んでいます。

毎号、本当に楽しみです。32号を読んで、なんか人間関係とか大変みたい、と驚きました。でも、とりあえず、CHOISIRがなくなってくなくてよかったです。私は何か投稿できるほどではないので悪いですけど、でも、すごく新鮮な意見ばかりで、いつもとても勉強になります。

よくわかんないけど、大変だと思うんだけど、とても楽しみにしてるし、なくなったら、すごく悲しくてショックだから、ぜひ、これからも長く続けてください。(こーゆー言い方は、色川さんは嫌いかもしれないんだけど。)

とりあえず、一読者からの応援(?)ラブ・メッセージ(?)と思ってください。

●と、匿名で手紙をくれた上、約5000円分の切手をカンパとして送ってくれた方、感謝しています。ありがとうございます。この手紙の他にも、激励のお手紙をくださった皆様、とてもうれしかったです。本当にありがとうございました。

## ■京都府・梶川雅子■

いつも楽しみにして、1Fのポストから5Fの自分の家までの間にバリバリと封をあけて読んでいました。

それで、「同窓会」のことについての文章は、「あー！ほんまやほんま、私もそう思った!!」と思いました。なんで高嶋兄が、あんな奴がもてるんだー！最終回は超怒ってしまった。嵐は死んでしまうし、高嶋兄は性転換したウシオと結婚するし、七月は嵐の生まれ変わりみたいな(!!)男の子に声をかけるわ、なんかスゴイものを見てしまった。

先日、妹が田原俊彦が好きなので、「課長、島耕作」(こんな字だったと思いますが)を見てたら、豊川悦司(私はこの人がすごく好きなのですが)が同僚役で出て、この人もまたゲイという設定で、田原俊彦に「おまえ

が好きなんだ」と言ったら、そのままぜんぜん出なくなる、という役でした。

今年は国際家族年だとかで、またまた何だかんだとズレを感じるが出てくるんだろうなー、と思います。

●ほんとにねー、「同窓会」のラストには唾然としました。誰か死ぬぞという私の予想はマンマと当たってしまったし。それも、最も自分に正直に生きていきそうな嵐が、あんな「道徳的な」理由で死ぬなんて。結局、ヘテロの恋愛幻想・家族幻想の前に、ゲイたちは皆、く殺されてしまった。それにしても、あのドラマのブームは何だったんでしょう。今シーズンは、さっぱりなのですが。

## ■埼玉県・八並知子■

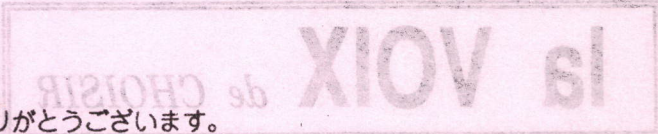
突然おしつけがましく同封してしまった同人誌は、私が冬のコミケで販売したもので、これもやはり内容は「やおい論」になっています。ただし、CHOISIRでのそれのように、おのおのが自分をさらけだして論じるといった類いのものではなく、あくまでも客観的なJuneブームの検証と事実に基づいたルポ的考察に徹している論文なのですが、それはそれで新しいパースペクティブなのではないかと自負(というと照れてしまいますが)しています。それで、もしよろしければ、CHOISIR紙上で、紹介していただけないでしょうか。

こじつければ、この論文は「家族阻害と家族愛の希求」というもう一つのセクシュアリティの側面としてのJuneを扱っていることにもなりますので、どうか御一考ください。

●というわけで、大学でセクシュアリティをテーマに研究中という八並さんの「女性による女性のための 男同士の恋愛物語」(栗原知代さんが今号で触れているものです)、B5判で80ページくらいのもので、やおいの実態に迫りたい方、ぜひ一読を。

ご希望の方は、600円を下記まで。





いつもご愛読ありがとうございます。

最近、「やおい論争」に関する問い合わせがめっきり多くなりまして、バックナンバー入手のご希望がスゴク（買い占めよ!）、ありがたいことです。お陰でバックナンバーの在庫がちょちょ切れていきますので、「やおい」に関心のある方々（主に新規購読者目当て、だけどさ）のため、合本企画も考えておりますです。その節はよろしく。

それはいいんですけど、いくらCHOISIRが営利目的で動いてきたものではないにしても、海賊版は今後は遠慮してほし〜いっ。

それから、大事なこと。郵便料金の値上げにともない、隔月刊の発行とさせていただきます。年間購読代の値上げはしません。

さて、次号の特集ですが、「性自認」、です。

ギョーカイ用語で言えば、ジェンダーもセクシュアリティも含まれます。自分が「男」なのか「女」なのか、という悩み・葛藤、大歓迎。いまはケリがついている方の、過去のウダウダも歓迎です。もちろん、いま現在のもの、ね。

もう少し具体的に言えば、期待される「性別による像」によって、あてはまらない自分を持つて余して苦しんだ体験、それはそれで楽しんじった経験、「男で男が好き」も「女で女が好き」ももちろん、いま現在、自分が好きでいる誰かとの関係を、性別によって支障を感じたとか、とにかく、性別（オス・メス）にからんでの、自分が何者なのかとか、特定（恋愛に限らない）・不特定の相手は自分のと間でどういふものなのかとか、いろんなご意見・お考えをお待ちしています。個人的体験は好評できないけど社会的な話・抽象的な話、もOKです。

締切は、3月中旬で、お願いします。

お手紙もお待ちしています。掲載してよい場合は、その旨と、お名前（ペンネームでも可）を忘れずに記載してくださいませ。

### INFORMATION

女のからだ10年〜リプロダクティブ・ヘルスと自己決定権

1994年2月26日(土) 午後1時〜5時

主婦会館（JR四ツ谷駅 麹町口より1分）

☎03-3265-8110

参加費1000円

◎シンポジウムです。パート1が、国内状況この10年、

パート2は、世界の動向と日本〜女たちの連帯。

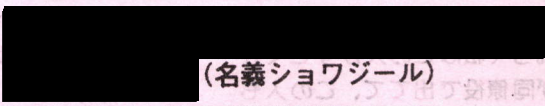
### CHOISIR Vol.33

発行年月 1994年2月

編集発行

郵便振替

年間購読代



(名義ショワジュール)

3000円（一部300円+送料+DM）